

## メッセージアウトライン サムエル記第一19:1～24

### 「ダビデの逃走」

[1]「サウルは、ダビデを殺すと、息子ヨナタンやすべての家来に告げた。しかし、サウルの息子ヨナタンはダビデを非常に愛していた」

自分の王の位を狙う者と邪推したサウルはダビデに対する殺意を今までは自分の胸のうちに秘めていたが、この時から公に息子ヨナタンや家来たちに公表した。サウルの霊的、精神的悪化が感じられる。しかし、ヨナタンのダビデに対する愛と友情は変わることがない。

[2-3]「ヨナタンはダビデに告げた。『父サウルは、あなたを殺そうとしています。明日の朝は注意してください。隠れ場にとどまり、身を隠していてください。私はあなたのいる野に出て行って、父のそばに立ち、あなたのことを父に話します。何か分かったら、あなたに知らせます。』」

ヨナタンは父サウルの殺意をダビデに告げて、翌日は野の隠れ場に身を隠すように言う。今、サウルやヨナタン、ダビデがいるギブアの山地には野に多くの身を隠す岩場や洞窟などがあったのであろう。そしてヨナタンは父にダビデのことで執り成し、その結果をダビデに知らせると言った。

[4-6]「ヨナタンはダビデを弁護し、父サウルに言った。『王よ、しもべダビデのことで罪を犯さないでください。彼はあなたに対して罪を犯してはいません。むしろ、彼のしたことは、あなたにとって大きな益となっています。彼が自分のいのちをかけてペリシテ人を討ったので、主は大きな勝利をイスラエル全体にもたらしてくださったのです。あなたはそれを見て喜ばれました。なぜ、何の理由もなくダビデを殺し、咎のない者の血を流して、罪ある者となられるのですか。』サウルはヨナタンの言うことを聞き入れた。サウルは誓った。『主は生きておられる。あれは殺されることはない。』」

ヨナタンはダビデに告げた翌日、父サウルとともにダビデの隠れている野に出て行って彼のために執り成しをした。この場所は彼らにとってなじみの場所で、毎日そこに出て行って、打ち合わせをしたりするのが習慣になっていたのかもしれない。ヨナタンのダビデに対する弁護は……

①ダビデは自分のいのちをかけてペリシテ人を討ち、主はイスラエルに大きな勝利をもたらされた。②それはサウルにとって大きな益となり、彼は喜んだ。③何の理由もなくダビデを殺し、その血を流すならば、それは主の前に罪ある者となることである。

サウルはこのヨナタンの説得を聞き入れ、ダビデ殺害を思いとどまった。

[7]「ヨナタンはダビデを呼んで、このことすべてを告げた。ヨナタンがダビデをサウルのところに連れて来たので、ダビデは以前のようにサウルに仕えることになった」

ヨナタンがダビデが隠れているそばで執り成しをしたのは、時間を置かずにサウルとダビデを和解させるためであったのかもしれない。ヨナタンは執り成しの結果をダビデに知らせ、その結果、彼は以前のようにサウルに仕えることになった。

[8-10]「再び戦いが起こった。ダビデは出て行って、ペリシテ人と戦い、彼らを討って大損害を与えた。彼らはダビデの前から逃げた。わざわざをもたらす、主の霊がサウルに臨んだ。サウルは、自分の家で座っていて、手には槍を持っていた。ダビデは豎琴を手にして弾いていた。サウルは槍でダビデを壁に突き刺そうとした。ダビデがサウルから身を避けたので、サウルは槍を壁に打ちつけた。ダビデは逃げ、その夜は難を逃れた」

「わざわざをもたらす、主の霊がサウルに臨んだ」…このことはペリシテ人との戦いにおけるダビデの勝利といつも結びついている。→18:10 自分よりもペリシテ人との戦いに強いダビデの実力を見せつけられることは、心理的にも彼の症状を悪化させる原因となっただろう。

ダビデがサウルから槍を投げつけられたのはこれが二度目であるが、この時もダビデはサウルから逃れた。時は夜であり、ダビデは妻ミカルの待つ自分の家に逃げたのであろう。

[11-13]「サウルはダビデの家に使者たちを遣わし、彼を見張らせ、朝に彼を殺そうとした。ダビデの妻ミカルはダビデに告げた。『今夜、自分のいのちを救わなければ、明日、あなたは殺されてしまいます。』そして、ミカルはダビデを窓から降ろし、彼は逃げて難を逃れた。ミカルはテラフィムを取って、寝床の上に置き、やぎの毛で編んだものを頭のところに置き、それを衣服でおおった」

ダビデの家はサウルの使者たちによって見張られた。翌朝に彼を殺す計画である。しかし、妻ミカルはダビデを窓から降ろし、彼は逃げる事ができた。さらにミカルはダビデが寝床で寝ているように見せかけた。「テラフィム」…家の守護神の像。→創世記31:19,34 いろいろなサイズがあった。しかし、これは真の神ではなく偶像である。ミカルの主なる神への信仰が疑われるところであるが、家の使用人が所有していたものかもしれず、とっさの判断でそれを借用したのかもしれない。詳しいことは分からない。

[14-17]「サウルはダビデを捕えようと、使者たちを遣わした。ミカルは『あの人は病気です』と言った。サウルはダビデを見定めるために、同じ使者たちを遣わして言った。『あれを寝床のまま、私のところに連れて来い。あれを殺すのだ。』使者たちが入って見ると、なんと、テラフィムが寝床にあり、やぎの毛で編んだものが頭のところにあった。サウルはミカルに言った。『なぜ、このようにして私をだまし、私の敵を逃がして、逃れさせたのか。』ミカルはサウルに言った。『あの人が、【逃がしてくれ。

私がどうしておまえを殺せるだろうか』と私に言ったのです。』

サウルは何としてでも、たとえ病気で寝床のままでもダビデを捕えて殺そうとする。彼は強い殺意に取り付かれている。もはや豎琴も役に立たない。使者たちが見ると、ダビデの寝床はテラフィムややぎの毛で編んだもので偽装されていた。サウルはミカルに対して非常に怒るが、彼女はダビデに脅迫されて逃がしたように言いつくろう。

[18]「ダビデは逃げて、難を逃れ、ラマのサムエルのところに来た。そしてサウルが自分にしたこと一切をサムエルに告げた。彼とサムエルは、ナヨテに行って住んだ」

ラマはサムエルの住んでいた町であるが、ナヨテは牧場または住まいと言う意味でサムエルが主催していた預言者たちの共同宿舎であったと思われる。ダビデはかつて自分に王任職の油を注いでくれたサムエルのところに逃げるより他の方法はなかったのであろう。ダビデからサウルが彼にした一切のことを聞いたサムエルはナヨテに彼をかくまい、そこで共に住むようにした。

[19-20]「するとサウルに『ダビデは、なんとラマのナヨテにいます』という知らせがあった。サウルはダビデを捕えようと、使者たちを遣わした。彼らは、預言者の一団が預言し、サムエルがその監督をする者として立っているのを見た。神の霊がサウルの使者たちに臨み、彼らもまた、預言した」

王のもとには色々な情報が寄せられる。そしてダビデの所在も、ラマのナヨテにいると知らされた。送られたサウルの使者たちはそこに預言者の一団がおり、彼らは預言しており、サムエルがその監督として立っているのを見た。

この預言者たちはサムエルによって起こされ、指導されていたのであろう。彼らはそこで訓練され、神の民としてのイスラエルの歴史の編集や学習、主を賛美する音楽の練習、各地に置かれていた聖所での祭儀などに従事していたのであろう。サウルの使者たちに神の霊が臨んだ結果としての「預言」とは、宗教的な陶酔状態になって神を賛美したり、神から受けたことばを語ることであったのであろう。その結果、彼らはダビデを捕えることができなくなったのである。

[21-22]「このことをサウルに告げる者がいたので、彼はほかの使者たちを遣わしたが、彼らもまた、預言した。サウルはさらに三度目の使者たちを遣わしたが、彼らもまた、預言した。サウル自身もラマに来た。彼はセクにある大きな井戸まで来て、『サムエルとダビデはどこにいるか』と尋ねた。すると、『今、ラマのナヨテにいます』という答えが返って来た」

サウルは二度目の使者たちを遣わしたが、彼らも皆、預言する者となり、ダビデを捕えることができなかった。そして三度目に遣わされた使者たちも同様であった。一向に物事が進まないの、ついに今度はサウル自身がラマへ出向くことになった。彼はセクにある大きな井戸まで来た。「セク」とは場所不明であるが、「大きな井戸」とはギブオンの池のことではないかと思われる。そしてそこでサムエルとダビデ

の所在を尋ねると「ラマのナヨテ」との答えがあった。これは地元の人々が答えたのであろう。しかし、この答えはすでに19節で彼に知らされていたことである。すなわち、彼らは逃げずに同じ場所にとどまっていたということになる。

[23-24]「サウルはそこへ、ラマのナヨテへ出て行った。彼にも神の霊が臨んだので、彼は預言しながら歩いて、ラマのナヨテまで来た。彼もまた衣類を脱ぎ、サムエルの前で預言し、一昼夜、裸のまま倒れていた。このために、『サウルも預言者の一人なのか』と言われるようになった」

サウルがラマのナヨテに行く途中、彼にも神の霊が臨み、預言しながらナヨテまで来た。ダビデを殺すために武装していた鎧や剣などの武具もみな脱ぎ捨て、サムエルの前で預言し、無力な裸のまま一昼夜倒れていた。一国の王である者が神の前では全く無力で、ただ神をあがめる預言をする者となったのである。

「サウルも預言者の一人なのか」と言われるようになったとは、王たる者がこんなところで裸になって預言者のまねをしてという悪い意味で言われたのかもしれない。

この19章ではサウルが公然と明らかにしたダビデ殺害計画が王子ヨナタンの弁護、ダビデの機敏な身のかわし、王女ミカルのかくまいと逃走、神からの霊による預言活動によって次々と挫折させられる様子が描かれている。サウルとその使者たちのした預言はサムエルのもとにいた預言者たちと同様の内容であったと理解すれば、ダビデ殺害の思いに燃えていた使者たちやサウルも、神からの霊によって変心させられた事件とみなされる。そして、それはサムエルとダビデを狂気の王サウルから守る意味を持つ。

ここでは神に退けられたサウルと神がともにおられるダビデの違いがはっきりと示されている。

もしもサウルが心からの悔い改めをもって主なる神に立ち返るならば、主は別の道を用意して下さったであろう。しかし、不信仰と王の位を守ろうとする自己保身、高慢とダビデに対するねたみと殺意は、彼から正常な判断を取り去り、疑いと殺意と狂気の行動へと彼を駆り立てるのであった。そしてダビデがこのサウルから逃げることができたのは、実はそこに主の御手があり、守られたがゆえのことであるということが分かるのである。→詩篇59篇

私たちはサウルのような道へ行くのではなく、信仰者としてどのように生きるべきか。  
→ローマ12:2、エペソ4:30-31